

## 「銷魂（消魂）」考

濱岡 久美子

### 一、はじめに

詩と詞とは形式だけでなくその内容面において大きな違いがある。特に詞が一文学ジャンルとして確立してからは、もちろんひとくくりにはできないが、詩は主に社会・政治・哲学を、詞は恋愛などのより叙情的な部分をそれぞれ担っていく傾向にある。詩詞の違いについては従来議論されてきたが、具体的にその中の一単語を取り上げての考察はなされていないようだ。しかし、詩と詞とで表現するものに違いがあるのであれば、当然用いられる語にも使い分けが生じてくる筈である。本稿でとりあげる「銷魂（消魂）」という語は、もとは詩語であったが詩から詞へと移行して、宋代には詞の語として定着し、詩では用いられなくなる傾向にある。この語の詩詞間における変遷を追って検討することにより、詩と詞の関係についての一考察を試みたい。

## 二、「銷魂（消魂）」Ⅱ「別れ」のイメージの定着

「銷魂（消魂）」あるいは「魂銷（魂消）」という表現は、「魂も消えてしまふような」という強い悲しみを表す語である。「銷魂（消魂）」表現の初出であり、以後の「銷魂（消魂）」イメージを決定づけたものは、六朝梁・江淹の「別賦」（『文選』巻十六）である。

黯然銷魂者、唯別而已矣。況秦吳兮絕國、復燕宋兮千里、或春苔兮始生、乍秋風兮暫起。是以行子腸斷、百感悽惻。…

（黯々として魂も消えてしまふようになるのは、ただ別れのみである。まして、秦や吳のような遠くの国、また燕や宋のような千里の彼方へ旅立つ別れの際、あるいは春のこけが生えそめ、秋風が立つ頃には格別である。故に、旅人ははらわたも断たれたようになり、心は悲しみにくれるのである。…）

その冒頭に「黯然として銷魂する者は、唯別れのみ」とあり、これに李善は「黯然として魂將に離散せんとするは、唯別れにして然るのみ。夫れ人の魂以て形を守り、魂散ずれば則ち形斃る。今別れて散ずるは、恨み深きを明らかにするなり」と注している。「別賦」では魂が消えるような別れというものも様々であり、例えば、遠方への旅立ちによる別れ、帰郷による別れ、志を持ってふるさとを離れる別れ、従軍による別れ、家族友人との別れ、夫婦の別れなどがある、と述べている。そして「別れ有れば必ず怨み、怨み有れば必ず盈つ」というように、どの別れにも怨みが必ず伴うものであるとしている。この賦が後世の韻文に与えた影響は非常に強く、江淹以降、「銷魂（消魂）」は別離による深い悲しみを表現する語として用いられるのである。

では江淹以前の韻文における「魂」はどのようなものとして取り扱われていたか。

まず「魂」という語が多く用いられるものとして『楚辞』が挙げられる。しかし『楚辞』における魂は「昔、余夢に天に登り魂中道にして枕あたる無し」（『楚辞』九章・惜誦）や「身は永く流れて還らず魂は長く逝きて常に愁ふ」（『楚辞』九歎・逢紛）といったように、単に肉体に対する精神を指して用いられる。『楚辞』中で「魂」を扱う代表作といえば「招魂」であるが、そこでも「魂よ帰り来たれ、君の恒幹を去りて何為れぞ四方する」というように、魂が肉体を抜け出すという発想はあるが、江淹の「銷魂（消魂）」のように、心理描写の比喻表現として「魂」を用いる例は見あたらない。

六朝以前の「銷魂（消魂）」の表現を用いた例には、北魏の作とされる老子化胡経玄歌の「太上皇老君哀歌七首・三」<sup>①</sup>があり、その中に「三魂消散し漸つき、五神安寧ならず」という句がある。「三魂」とは人の心にあるという三つの靈魂のことを指し、先に述べたような『楚辞』中の「魂」と同じく、肉体に対する精神としての用法であって、やはり比喻表現とは考えられない。

比喻表現としての「銷魂（消魂）」は江淹が初出だが、同じく梁代、江淹より少し遅れる時期の何遜「為人妾思」と劉孝威「思婦引」にも「銷魂（消魂）」の表現がみられる。（訳は傍線部分。以下同じ）

何遜「為人妾思二首・一」

魂銷形已去、釵落猶依枕。欲去淚無皆、不看悲復甚。

（魂は消えたようになり、体もすっかり痩せ衰えてしまった。簪が滑り落ちてもお枕によりかかったままである。）

劉孝威「思婦引」

胡地憑良馬、懷驕負漢恩。甘泉烽火入、回中宮室燔。

錦車勞遠駕、繡衣疲屢奔。式師已喪律、都尉亦銷魂。

童堆求援急、孤塞請先屯。櫪下馭双駿、腰辺帶両韃。

乘障無期限、思婦安可論。

（式師將軍はすでに軍規を喪い、都尉もまた銷魂する。）

何遜の「為人妾思」とは人の妾の気持ちになつて詠んだ詩、という意味であり、やつて来なくなった男を思い悲しむ女性の姿が描かれた閨怨詩である。ここでの「魂」は「形」に対応するもので、どちらかといえば肉体に對する精神の意味であるが、『楚辞』の例とは異なり、比喩的な表現であろうと考えられる。梁代に編まれた、艷詩・宮体詩を集める『玉台新詠』には何遜の詩が複数収められている。それらとこの「為人妾思」とを照らし合わせると、「燕子戯れて簷に還り、花飛びて枕前に落つ。寸心君見ずや、涙を拭ひ坐して調弦す」（『玉台新詠』卷十「為人妾思」）や「竹葉 南窓に響き、月光 東壁を照らす。誰か知らん夜独り覚め、枕前に双涙滴るを」（『玉台新詠』卷十「秋閨怨」）といったように、「枕」、「涙」といった語彙や、来なくなった男性を独り悲しむという状況設定が、大変似通っていることがわかる。「為人妾思二首・一」は『玉台新詠』に収められてこそいないが、まさしく玉台新詠風の閨怨詩といえよう。「思婦引」は『樂府詩集』卷五十八に収められる琴曲歌辞である。邵王が衛の賢女を娶ろうと考えたが、果たさずして亡くなつてしまった。賢女は王亡き後にその太子に言い寄られるが、聞き入れなかつたため、深宮に幽閉される。帰りたいと願うも叶わず、琴を弾いてこの曲を作り、奏し終つて後、首をくくつて死んだという。劉孝威の作はこの話の、賢女の帰郷を願う情だけを用いた、と『樂府解題』にはある<sup>⑧</sup>。樂府の内容は、従軍のために離れた故郷を思い「銷魂」するものである。劉孝威自身も、侯景の乱の時に都を脱出し、西へ向かう途中で病に倒れ亡くなつた人であるので、我が身をなぞらえた作であるかもし

れない<sup>③</sup>。これら何遜と劉孝威の作は、江淹よりも時期的には少し遅れるが、直接「別賦」の影響を受けているかどうかは定かではない。しかし、六朝における比喩表現としての「銷魂（消魂）」の例として、挙げておく必要があるだろう。

心理描写として「銷魂（消魂）」を用いた江淹の「別賦」の影響は北朝にも及んでおり、隋の煬帝楊広には「寒鴉飛ぶこと数点、流水孤村を遶る。斜陽落ちんと欲する処、一たび望めば黯として消魂す（「野望」）」という詩がある。鴉が飛び陽が沈む冬景色のもの悲しさを、「消魂」で表現しており、「黯として消魂す」は「別賦」の「黯然銷魂」を踏まえていると考えられ、江淹の賦の影響がうかがえる。この詩自体は特に別れの詩であるといえないのだが、「別賦」とともに後世に影響を与えたことは確かであり、宋の秦觀には、この詩を作り替えたという詞が残っているほどである<sup>⑤</sup>。

さて、以上のように六朝期に現れた「銷魂（消魂）」の表現は、唐代に至って別離の悲しみを表す語として定着する。『全唐詩』中で「銷魂（消魂）」の表現を用いる詩は七十二首数えられる。うち数例を挙げる。

宋之問「渡吳江別王長史」

倚欄望茲川、銷魂独黯然。鄉連江北樹、雲断日南天。

劍別童初没、書成雁不伝。離舟意無限、催渡復催年。

（舟に乗ってこの川を眺めれば、魂も消えたように独り鬱々とした気分になる。）

杜甫「送裴五赴東川」

故人亦流落、高義動乾坤。何日通燕塞、相看老蜀門。

東行応暫別、北望苦銷魂。凜凜悲秋意、非君誰与論。

（東へ赴く君とは暫しの別れ、戦乱さなかの北の故郷を眺めては魂も消えんばかり。）

錢起「別張起居」（時多故）

有別時留恨、銷魂況在今。風涛初振海、鵝鷺各辞林。

旧国関河絶、新秋草露深。陸機嬰世網、応負故山心。

（別れはしばしば恨みを残すもの、ましてや今のような戦乱時の別れは魂も消えそうになるものだ。）

宋之問の詩は唐代の詩における「銷魂（消魂）」表現の初出である。「銷魂」とともに「黯然」という語が用いられていることから、やはり「別賦」の影響を受けていると考えられよう。杜甫と錢起の詩はどちらも安史の乱中に友人と別れる作である。杜甫の詩は戦乱中、成都での作。東川は蜀の東都の潼川を指し、そこへと旅立つ友を見送るものである。「北望苦銷魂」は、成都より北方の洛陽を望み、魂も消えるような心持ちになる、という意味である。錢起の作の「時に故多し」の「故」とは災い、という意味であり、これもやはり安史の乱を指す。平時でも別れは恨みを伴うものであるのに、ましてやこのような戦乱さなかの別れは、魂も消えんばかりにたらいものであるというのである。乱世ゆえに、もう再び会うこともかなわないかもしれないと思いでいっそう「銷魂」するのであろう。いずれも別離の悲壮感ただよう「銷魂（消魂）」の例である。別離を悲しむ「銷魂（消魂）」を用いる詩には、これらのように「くを送る」「くと別る」といった題が多いことも特徴である。唐代の詩に於ける「銷魂（消魂）」にはこういった友人との別離に関するものが最も多い。

更にこの時期、「銷魂（消魂）」||「別離」というイメージは、詩に限らずかなり一般的に定着していたようだ。

例えば、玄宗皇帝期の事柄を集めた『開元天宝遺事』巻下（五代後周・王仁祐撰）に「長安の東、灞陵に橋有り、來迎、去送、皆此に至り、橋、離別の地為り。故に人之を銷魂橋と呼ぶなり」という記述がある。この橋は陝西省の灞水に架かる灞橋のことを指す。灞橋は『三輔黃圖』巻六に「灞橋長安の東に在り、水を跨ぎて橋を作る。漢人客を送りて此の橋に至り、柳を折りて別れに贈る」とあるように、旅立つ人を見送る場所とされていた。その送別の橋が「銷魂橋」と呼ばれるようになったということも、唐代における「銷魂」Ⅱ「別離」のイメージの定着を裏付けるであろう。

また、後漢・蔡琰の作と伝えられる「胡笳十八拍・十三」にも用例があるのだが、これは実際は蔡琰の作でなく唐人の仮託であろうとされている。<sup>⑥</sup> その詩に「一たび歩けば一たび遠く足移し難く、魂消え影絶ゆるも恩愛残る」という句がある。蔡琰が子と引き離される際に詠んだ詩であるとされているが、子との別離を悲しむのに「魂消」という句を用いたということは、唐人にとつての「銷魂（消魂）」が別れを表すものであったことを示しているだろう。更に「銷魂（消魂）」Ⅱ「別れ」のイメージの定着を示す例に、中唐の詩人劉禹錫の詩「流水閨門の外、秋風柳条に吹く。従来客を送る処、今日自ら魂銷す（「別蘇州二首・二」）」がある。閨門は蘇州城の門のことで、当時大変繁華な地であった。「従来送客処」とあるように、この門外は旅立つ者を見送る場所であったのだろう。「自ら魂銷す」という表現で、今自らが蘇州を発つことが示されている。「秋風」、「柳条」と同じように「魂銷」が別れ・旅立ちを示唆する語であったことがうかがえる。

また、別離の一種ではあるが人との直接的な別れではなく、過ぎ去った過去を思い「銷魂（消魂）」する例もみられる。こういった懐古による「銷魂（消魂）」の唐代の例として、盛唐・周朴の「春日秦国懷古」が挙げられる。

#### 周朴「春日秦国懷古」

荒郊一望欲消魂、涇水縈紆傍遠村。牛馬放多春草尽、原田耕破古碑存。

雲和積雪蒼山晚、煙伴殘陽綠樹昏。數里黃沙行客路、不堪回首思秦原。

(荒れ果てた郊外を一度見渡せば魂も消えんばかり。涇水は曲がりくねって遠方の村に沿って流れる。)

これは亡国を思う「消魂」の例である。「荒郊一望欲消魂、涇水縈紆傍遠村」の句は前述した煬帝の「野望」詩にみられる「流水遶孤村」、「一望黯消魂」の句を踏まえていると考えられる。また、中唐・暢当の「九日陪皇甫使君泛江宴赤岸亭」に「徒らに言ふ、歎び座に満つと、誰か覚ゆ客魂消ゆるを」という句がある。周朴の詩にも「客路」という語があるが、この二詩に共通する「客」は、故郷を遠く離れた旅人、という意味であり、暢当の詩の「客魂」は、旅人の魂を指す。広義では別れの悲しみともいえるだろうが、旅愁による「消魂(消魂)」の例といえる。晩唐・張喬の「寄績溪陳明府」詩、「六朝興廢の地、行子一たび銷魂す」というのもその例であろう。また、故人を思い「銷魂(消魂)」する例として、胡曾の詠史詩「望思台」に「至今 漢武銷魂の処、猶ほ悲風の木上より来たる有るがごとし」という句がある。これは、漢武帝が、冤罪により自害した息子である戾太子のために築いた台の上で、亡き子を思って「銷魂」するという詩であり、別離のうちでも特に故人を思う「銷魂(消魂)」である。次に挙げる元稹の「夜間」も、同じく故人(ここでは妻)を悼む「銷魂(消魂)」詩である。

#### 元稹「夜間」

感極都無夢、魂銷軛易驚。風簾半鈎落、秋月滿床明。

悵望臨階坐、沈吟遶樹行。孤琴在幽匣、時迸斷弦聲。

(心は尽き夢などはたえて見ず、魂は消えんばかりですます目も覚ましがちだ。)

この詩は『元氏長慶集』巻九の巻頭に収められ、「此後並悼亡」と題注がついている。<sup>⑧</sup>「悼亡」とは晋の潘岳

に始まる、妻との死別を悼む詩のことを指す。末句の「断弦」は、古くは琴瑟を夫婦の喩えとしたことから、妻を喪うことを指す。このような悼亡詩における「銷魂（消魂）」については、もう一例、同じく元稹の「感夢」詩に「行きて吟じ坐して歎じ何ぞ極まれるを知らん、影絶え魂銷え動もすれば年を隔つ」という句がある。これも故人への思いを表す「銷魂（消魂）」として分類されるだろう。

以上のように、「銷魂（消魂）」表現は江淹の「別賦」より発し、唐代の詩において別離の悲しみを表現する詩語として定着した。その多くは友人との別れを惜しむ詩、送別の詩にみられる。また別離の一種として、懐古の念や旅愁、故人を悼む詩にも用いられる。大きく捉えると、「銷魂（消魂）」は別れや、失ったものやことに對する悲しみを表現する語であると考えられる。しかし中唐以降、それまでとはまた異なる別離をテーマにした「銷魂（消魂）」が現れるのである。

### 三、閨怨詩と唐五代の詞における「銷魂（消魂）」

前章で述べたように、唐代の「銷魂（消魂）」は最も多いもので送別詩、次いで懐古、旅愁や死別の詩に、別れの強い悲しみを表すものとして用いられた。

それでは、それ以外の別離における「銷魂（消魂）」とはどのようなものか。それは何遜「為人妾思」にみられたような、男女間の別れをいうものである。何遜の作は女性の立場よりいなくなつた男性を歎き「魂銷」する。初唐・盛唐の「銷魂（消魂）」の詩における別離は、どれも友人間のものであり、このような閨怨の例は見られなかった。唐代の閨怨詩における「銷魂（消魂）」の初出は、中唐・権徳輿の「玉台体十二首・六」である（この章

における閨怨の詩詞に関しては、より比較しやすくするために全訳を附しておく。

権徳輿 「玉台体十二首・六」

涙尽珊瑚枕、魂銷玳瑁牀。羅衣不忍著、羞見繡鴛鴦。

(涙が珊瑚の枕に尽き、魂は玳瑁のしとねに消えんばかり。うすぎぬの衣を着るにも忍びず、鴛鴦の縫いとりを見るのも  
うづい。)

「玉台体十二首」にはどれも男女の出会いと別れとが詠まれており、これはそのうちの一首である。玉台体とは艶詩を集めた『玉台新詠』にみられる、繊細かつ艶美な詩風を模したもの、という意味である。「羞見繡鴛鴦」とは、鴛鴦がつがい夫婦を表すものであるので、ひとりきりである自分にとっては縫いとりの鴛鴦さえも見るに忍びない、ということをいう。また、何遜の詩と同様に用いられている「涙が枕を濡らす」という表現は、閨怨詩の常套句である。「銷魂(消魂)」が閨怨詩に用いられるのは、中唐期には権徳輿の一首のみであり、他に例をみない。なぜこの一首のみなのかというと、この時期にはまだ「銷魂(消魂)」の別れは友人間におけるものであり、権徳輿の例は、玉台体という艶詩の枠の中で詠んだ詩であるがために、例外的に閨怨の別れになった、と考えるのが妥当であろう。閨怨詩における「銷魂(消魂)」が多くみられるようになるのは、権徳輿より更に時代が下り晩唐の詩人、韓偓の「宮詞」以降である。

韓偓 「宮詞」

繡裙斜立正銷魂、侍女移灯掩殿門。燕子不来花著雨、春風応自怨黄昏。

(繡の施された裳を引きずり斜めに立てば魂も消えんばかり。侍女が灯りをとめて門を閉ざす時刻となってしまった。

燕(あなた)は訪れず花は雨に濡れている。春風も黄昏を怨んでいることだろう。)

韓偓は力強い詩を作る一方で、艶詩を詠むことでも知られている。「宮詞」は宮廷生活を詠んだものであり、艶詩を集めた『香奩集』に収められ、後にその詩体は香奩体といわれる。「燕子不来」というのは、燕は毎春やってくるはずであるのにそれがやってこない、つまり思う人が来なくなった状況を表す一種の定型表現で、閨怨の作品に非常によく用いられる。この「宮詞」の場合の「燕子」は特に皇帝を指す。一般的な男女の閨怨とは少し異なるかもしれないが、女性の立場より不在の男性を思うという状況設定は、閨怨詩と何ら違いはない。

同じく帝の寵愛が離れてしまったことを歎くものに、晩唐の詩人・高蟾の樂府「長門怨」、「魂銷え尚ほ愧ず金炉の燼、思ひ起こり猶ほ慚ず玉輦の塵」の句がある。「長門怨」は司馬相如の「長門賦」（『文選』卷十六）に描かれる故事を本に、陳皇后が漢武帝の寵を失い長門宮に退いて独り鬱々とした日々を過ごす情景を賦したものである。韓偓の作と同じく来なくなった帝をうらみ「銷魂（消魂）」する例である。

次の二首は、韓偓より少し時代が降り、南唐の詩人である李中の詩である。李中は南唐に仕えた人物で、その作品は「人を驚かせ鬼を泣かしむる語なり」と評価されるように、感傷的なものが多い。

#### 李中「春閨辞二首・二」

辺無音信黯消魂、茜袖香裙淚積痕。海燕歸來門未掩、悠悠花落又黃昏。

（辺境へ行ってしまったあの人からの便りとしてなく、鬱々として魂も消えるかのよう、茜色の袖、香しい裾に涙の痕がしみつく。海を渡る燕（あなた）が帰ってくるのを待って門は閉ざさない。ゆるゆると花が落ち、また今日も日が暮れていく。）

#### 李中「悼亡」

巷深芳草細、門靜綠楊低。室迳人何処、花殘月又西。

武陵期已負、巫峽夢終迷。獨立銷魂久、双双好鳥啼。

(こみちの奥深く芳草が細く生え、門のあたりは静かに緑の柳が低くたれる。妻の部屋は近いけれどもいったい彼女はどこにいるのだろうか。花はそこなわれ月はまた西へ傾こうとしている。また会おうという約束はすでに破れ、夢での出会いもついに迷ったまま。魂も消えんばかりの思いで長いあいだ独り佇めば、つがいの鳥が啼くのが聞こえる。)

「春閨辞」は詩題の通り春の閨怨の情を描き、辺境へと去り音沙汰無くなった恋人を思い涙する作である。時は春の黄昏、不在の男性を燕になぞらえる比喻、男性を迎え入れる「門」の描写、といった表現から、明らかに韓偓の「宮詞」を踏まえていると考えられる。また「悼亡」は先に挙げた元稹の作と同じく亡妻を悼む詩であり、敵密に言えば閨怨詩からは外れるが、用いる語句は極めて閨怨詩に近い。「武陵期」は陶淵明『桃花源記』に出てくる別天地である武陵源と、『幽明録』にある劉晨・阮肇とが天台山にて仙女と逢瀬をかわしたという故事とが混同したものである。「巫峽夢」は楚王が夢の中で巫山の神女と出逢った故事を指す。どちらも幻の世で交わされた約束のことである。このような男女間の別れにおける「銷魂(消魂)」は、晩唐の韓偓以降、盛んにみられるようになる。ただ、従来のような友人との別れ、懐古の念などを主題にした「銷魂(消魂)」の詩もなくなるわけではない。例えば韓偓にも「東島西兔 車輪の似く、劫火桑田 復た論ぜず。唯だ風光と踪跡と有り、思ひ量るに長く是れ黯かに銷魂す(「踪跡」)」という詩があるが、この「銷魂(消魂)」は懐古の念より生じるものであろう。

晩唐五代の「銷魂(消魂)」表現を用いる詩、四十首について調べてみると、閨怨詩もしくは男女間の別れによる「銷魂(消魂)」は十例数えられる。数としては決して多いとはいえないが、晩唐における「銷魂(消魂)」詩

に、從來になかったこの閨怨の用法が一定量みられるようになったということは特筆すべき事柄である。以上のように、広く別れを示す比喻表現として発生した「銷魂（消魂）」は、晩唐期に更に閨怨の用法を加えるのである。

では、同時期の詞においてはどうかであったか。詞の初期のアンソロジーである『花間集』中には、「銷魂（消魂）」、「魂銷（魂消）」という表現が十五例みつかるといえる。以下に数例を挙げる（括弧内は『花間集』における巻数を指す）。

温庭筠「菩薩蠻」（卷一）

雨晴夜合玲瓏日，万枝香袅紅糸私。閑夢憶金堂，滿庭萱草長。 繡簾垂翠歎，眉黛遠山綠。春水渡溪橋，

凭欄魂欲消。

（雨上がり合歡の花が露を帯び、輝くような日。枝々に香りたゆたう紅の花房が垂れる。うたたねの夢にみるは昔の華やかだった住まい、庭いっばいに伸びた忘れ草。 縫いとりの施された簾から垂れる飾り房のうち、（もの思う女性の）

眉は遠くに見える緑の山のように。春の水流れる谷川の橋を渡り、欄干にもたれば魂も消えんばかり。）

韋莊「小重山」（卷三）

一閉昭陽春又春。夜寒宮漏永，夢君恩。臥思陳事暗消魂。羅衣濕，紅袂有啼痕。 歌吹隔重闈，遶庭芳草

綠，倚長門。万般惆悵向誰論。凝情立，宮殿欲黃昏。

（ひとたび昭陽殿が閉じられ春がまた巡ってくる。宮中の水時計が時を刻むのも長く感じられる寒夜に、夢にみるは昔の帝の恩愛。臥して過去を思えば鬱々と魂も消えんばかり。うすぎぬの衣が湿り、美しい袖には涙の痕。 華やかな歌や

演奏の音は幾重にも重なる門に隔てられ、ここまでは届かない。青々とした芳草が庭をめぐる長門宮にひとり佇む。千々の歎きは誰に向かって訴えればいいのか。あなたを深く思う心を胸にじっと立ちつくせば、宮殿は暮れようとしていく。）

顧復「虞美人」(卷六)

碧梧桐映紗窓晚，花謝鶯聲懶。小屏屈曲掩青山，翠幃香粉玉炉寒。兩蛾攢。顛狂年少輕離別，辜負春時

節。画羅紅袂有啼痕，魂銷無語倚闌門。欲黄昏。

(梧桐が紗のカーテンをひく窓に映える晩、花は散り鶯の声も物憂い。青山を描いた小さな屏風をたて、翠の帳におしりの香り、火もない玉炉は寒々しい。美しい両眉をひそめる。浮気な若者はあっけなく去ってしまい、私はこの素晴らしい春に背くかのように。羅の美しい袖には涙の痕、魂も消えそうに言葉とてなく闌門によりかかれ、日が暮れようと

していく。)

いずれも晩唐の閨怨詩にみられたような「銷魂(消魂)」であり、男性に顧みられなくなった女性が、独り恋人の不在を歎いて「銷魂(消魂)」するという内容のものである。語彙の面からみても、これらの詞と先に挙げた閨怨詩とは大変似ていることがわかる。特に韓偓の「宮詞」が詞に影響を与えたことは明らかであり、「宮詞」の「斜立」が『花間集』中の詞では「憑欄」、「倚闌門」といった表現に換えられて用いられ、また「黄昏」という語もみえる。また、韋莊の「小重山」は、『草堂詩余』巻一(四部備要本)に所収のものでは、「宮詞」という題がついており、内容も韓偓の作と極めて近い。

更にこれらの詞と閨怨詩とはその内容や語彙以外にも類似する点が多々ある。まず閨怨詩である韓偓の「宮詞」は、『香奩集』の自序に彼の作品が「往往にして士大夫の口に在り、或いは楽官声律に配入す」とあるように、何らかの場で歌われていた可能性が考えられ、その点でも歌辞文芸である詞と極めて近いものである。また閨怨詩と詞との境界を示すものとして、清代の詩人である王士禛の詞話に次のような一文がある。「或るひと詩詞詞

曲の分界を問ふに、予曰く、『奈何すべくも無く花落ち去き、曾て相識りしが似く燕帰り来たる』、定めて香奩の詩に非ず。」ここに引用されている「無可奈何花落去、似曾相識燕帰来」は、北宋晏殊の詞、「浣溪沙」<sup>⑤</sup>の一部である。王士禛の主張は、晏殊の詞は艶ではあるけれども香奩体の詩とは異なるものである、ということである。このようにたとえ香奩体のような艶詩であっても、詩詞には明確な境界があるということは従来議論されてきた。しかし、それは裏を返せば、香奩体の詩と詞とが内容的に非常によく似ていると捉えられていたということを表すだろう。以上、語彙やその性質から鑑みるに、唐五代の閨怨詩と詞とは大変近いものであった。そういった状況下で、「銷魂（消魂）」の様々な別れのうち、特に閨怨の用法が作者によって選り取られ、詩から詞へと入っていったのである。

詞はもちろん自らの実体験に即して作られるものもあるが、そうでないものが多い。たとえば詞人のほとんどは男性だが、その作品の多くが女性の立場より詠んだものである。これは詞があくまである状況を設定した上で作られるものである、という特徴を表していよう。つまり詞の語というのはその設定にふさわしいものでなくてはならず、詞においては語の持つ細かい意味も当然重要ではあるが、何よりその雰囲気が重要視されるのである。それが同じような設定の詞において似た語彙が多用される原因であろう。沢崎久和氏は『花間集』中に用いられる「銷魂」について、「魂」等の韻字が「特定の語と結合し、固定化した情景を呼び起こす」こと、また「銷魂（消魂）」が往々にして「黯」という語と結びつくこと、を示唆されている<sup>⑥</sup>。筆者は「黯」が「銷魂（消魂）」とともに用いられるのは、やはり江淹の賦の「黯然銷魂者、唯別而已矣」の影響によるものであり、「固定化した情景」とはすなわちこの場合閨怨であると考ええる。『花間集』に収められる宋以前の詞においては、「銷魂（消魂）」を用いることによって、男女の離別・気持ち離れたしまった恋人を怨めしく思うというイメージが喚起

されたと考えられる。だからこそ同じような閨怨の詞において、頻繁に用いられるのである。

以上のようにして「銷魂（消魂）」の表現は、晩唐の閨怨詩から同時期の詞へとその用法が引き継がれていく。そして詞において閨怨を表現する語として定着するのである。唐五代の「銷魂（消魂）」表現を用いる詞はほぼ全て『花間集』にみられるような閨怨の詞であり、それまでの詩に多くみられた、友人との別れを傷むようなものは殆ど見あたらない。例外として南唐後主・李煜の「子夜歌」があり、その前関に「人生 愁恨何ぞ能く免れん、銷魂 独り我れ情何ぞ限りあらん。故国 夢に重ねて帰り、覚め来たりて双淚垂る」とある。これは唐詩にもみられたような故国を思う「銷魂」である。閨怨にのみ用いられたこの時期の詞における「銷魂（消魂）」表現を、なぜ閨怨ではない詞に用いたのか。その原因は、南唐最後の天子であり国滅びた後囚われの身となった、という李煜の置かれた特殊な状況にあると考える。彼は特に幽閉されてからは「子夜歌」のような亡国を思う詞が特徴的とされる詞人であるので、「銷魂」を閨怨詞ではなくこうした懐古の詞に用いたことも頷ける。従来の唐詩における懐古の流れを汲む「銷魂」である。また、李煜は『花間集』中の詞にみられる類型的な作風、いわゆる「花間調」より脱却し、詞に新たな境地をもたらした人物であり、彼の作風は宋詞のさきがけとなるという<sup>⑧</sup>。次章で詳しく述べるが、「銷魂（消魂）」の詞は宋代になると、閨怨に加え新たな用法がみられるようになる。李煜の「子夜歌」は、詞が「花間調」から新しい境地に至る過渡期において、「銷魂（消魂）」の詞にもまた変化がみられるということを示しており、非常に重要であるといえよう。

#### 四、宋代詩詞における「銷魂（消魂）」

宋代にはいると、詞の増加と共に「銷魂（消魂）」表現を用いる詞も約二百首以上に増える。これに対して、宋詩における例は四十数例にまで減少する。今回調査の対象としたのは、『全宋詞』に収められる約一万九千九百首、『全宋詩』は数十万首あるうちの、主要詩人における約三万九千五百首である。詞と詩との作品数の割合を考慮すると、著しく詞での使用が増加し、詩での用例が減少したことを認めざるを得ない。これは、宋代において「銷魂（消魂）」という表現が詩ではなく詞の語彙として認識されていたことの表れである。

では、宋詞の「銷魂（消魂）」にはどのようなものがあるか。唐五代詞の「銷魂（消魂）」は、閨怨を表現するものばかりであった。その中で例外として李煜の詞が存在していたことは先述した通りである。しかし、北宋中期より、閨怨以外の詞における「銷魂（消魂）」が数多くみられるようになるのである。そしてその転機にあつて重要な人物は、次に挙げる柳永、張先、晏殊の三人である。それぞれの生没年は、張先九九〇〜一〇七八年、晏殊が九九一〜一〇五五年、柳永は生没年は定かではないが宰相であつた晏殊との接触があり、三人ともほぼ同時期を生き、また艶詞が中心であつた詞の世界にそれぞれ新たな展開を加えた人物である。

#### 柳永「輪台子」

一枕清宵好夢，可惜被、鄰雞喚覺。忽忽策馬登途，滿目淡煙衰草。前驅風觸鳴珂，過霜林、漸覺驚棲鳥。冒征塵遠況，自古淒涼長安道。行行又歷孤村，楚天闊、望中未曉。念勞生，惜芳年壯歲，離多歡少。歎斷梗難停，暮雲漸杳。但黯黯魂消，寸腸憑誰表。恁驅驅、何時是了。又爭似、卻返瑤京，重買千金笑。

（後闕訳：辛い人生を振り返れば、若い頃に別れが多く飲びは少なかったことが悔やまれる。折れた葦枝のように定まり難い我が身、暮れの雲が次第に黯くなつていくことを歎く。ただ鬱々として魂は消え、断たれた腸は何によって示せばよいのだろうか。このように走り回る身もいつ終わることやら。どうしてまた賑やかな都へと帰り、再び妓楼遊びをするに

勝ることがあろうか。(

張先「御街行」(送蜀客)

画船横倚煙溪半。春入吳山偏，主人憑客且遲留，程入花溪遠遠。數声荈葉，兩行霓袖，幾處成離宴。紛  
紛歸騎亭皋晚。風順檣烏轉。古今為別最消魂，因別有情須怨。更獨自、俛上高台望，望盡飛雲斷。

(後闕訳：帰途につく騎馬で混み合う水辺の亭は暮れゆく。風は舟の風見鶏に従って転ずる。古より別れは最も消魂するもの、別離によつて情あるものは全て怨むのだ。更に独り高台に上りきつて遠くを望めば、視界のかなたに、飛雲がまばらに浮いている。)

晏殊「浣溪沙」

一向年光有限身。等閒離別易銷魂。酒筵歌席莫辭頻。滿目山河空念遠，落花風雨更傷春。不如憐取眼前人。

(前闕訳：あつという間の年月、限りあるこの身。なおざりな別れは魂も消えそうになりやすい。酒を飲み歌を聴くこの宴席が頻繁にあつても、そう辞退するものではないよ。)

どれも従来の「銷魂(消魂)」詞にはみられなかった、閨怨以外の用法である。柳永の「輪台子」は彼の得意とする羈旅の詞である。馬にまたがり独り行く旅人の心情を描いたものであり、「魂消」はいつ終わるともしれぬ放浪の身にある己を歎く言葉である。唐代の詩にみられた旅愁の用法といえよう。彼の詞は民間で大いに流行し、この「輪台子」についても張先が難をつけたという詩話があることから、同時期の人にもよく知られていた作で

あることがわかる。もちろん彼の詞は後代にも多大な影響を与えた。

庶民の間で活躍した柳永とは対照的に、晏殊・張先は文人詞において新しい局面を拓いた。張先の「御街行」は題注に「送蜀客」とあるように人を送る詞である。「古今為別最消魂，因別有情須怨」は、既に定着している江淹の「黯然銷魂者、唯別而已矣」、また「有別必怨、有怨必盈」を踏まえた句である。唐詩によくみられた、友人を送る送別の「銷魂（消魂）」の詞における例は、みるところ彼が最初だと思われる。また詞にこうした添え書きをする風習は彼以降の文人詞に流行したが、それは日常的な題材をテーマにした詞が増えるようになったこととの表れであるという。添え書きのついた「銷魂（消魂）」詞は、北宋期には張先を始めとして二割以下に過ぎないが、南宋期になると全体の半数以上にも増加する。その中には張先の作と同じく「くを送る」というものも少なくない。これは「銷魂（消魂）」の詞に閨怨だけでなく様々な場面を詠むものが増えたことを示している。

「浣溪沙」は宴席の詞における「銷魂（消魂）」の例である。晏殊は香奩体にも似た艶美な詞を多数作る一方で、この「浣溪沙」のような、従来見出せなかった、一種朗らかな調子を持つ詞も手がけている。「銷魂」するのは「離別」によってなのだが、詞自体には従来の「銷魂（消魂）」の別れにみられたような悲壮感は感じられない。「時の過ぎるのはあつという間なのだから、今を楽しもうではないか」というこの詞は、これまでの「銷魂（消魂）」を用いる詞には無かったものであり、詩にみられる特徴でもある。詞が詩の領域にまで表現を拡張したことの表れであろう。

以上に挙げたように、北宋中期の段階で、「銷魂（消魂）」は、閨怨に限らず様々な内容の詞に詠まれるようになる。唐五代においては閨怨のみであったが、北宋期には「銷魂（消魂）」表現を用いる詞のうち、閨怨の詞は六割以下、南宋期には四割以下にまで減少する。このように唐五代でいったん閨怨の語として定着したかのように

みえた「銷魂（消魂）」は、北宋中期の段階で詞が新たな領域に展開するに伴い、またその表現する範囲を拡げるのである。以下、南宋の「銷魂（消魂）」の詞の例を挙げる。

陸游「沁園春」

一別秦樓，軫眼新春，又近放灯。憶盈盈倩笑，織纖柔握，玉香花語，雪暖酥凝。念遠愁腸，傷春病思，自怪平生殊未曾。君知否，漸香消蜀錦，淚漬吳綾。難求繫日長繩。況倦客、廳零少旧朋。但江郊雁起，漁村笛

怨，寒釭委燼，孤硯生冰。水繞山圍，煙昏雲慘，縱有高台常怯登。消魂處，是魚牋不到，蘭夢無憑。

（後闕訳：太陽を長縄でつなぎ止め、時をとめようとしても無理なこと。ましてや旅に疲れうらぶれて古い友もない私には。城外の江に雁が飛び立ち、漁村に笛の音が怨みがましく響き、寒村に点る灯りは燃え尽きるまま、わびしい硯には氷が張るほどの寒さ。水は山の周りを廻り、昏くかすんだ空に雲は惨々として、たとえ高い台があるうとも、常に登るところを尻込みしてしまう（高いところから見渡しても、あなたの姿は見つけられないから）。魂も消えてしまうようなのは、便りも届かず、いい夢などみられそうにない時。）

姜夔「八歸」（湘中送胡德華）

芳蓮墜粉，疏桐吹綠，庭院暗雨乍歇。無端抱影銷魂處，還見篠牆螢暗，蘚階蛩切。送客重尋西去路，問水面、琵琶誰撥。最可惜、一片江山，總付与啼鴉。長恨相從未款，而今何事，又對西風離別。渚寒煙淡，櫂移人遠，縹緲行舟如葉。想文君望久，倚竹愁生步羅襪。歸來後、翠尊雙飲，下了珠簾，玲瓏間看月。

（前闕訳：蓮の花粉が地に落ち、まばらになった梧桐の緑に風が吹き、庭は暗くなり降っていた雨はにわかにはやむ。なすすべもなく独りきりの影を抱いて魂も消えんばかり、また竹垣に黯く光る螢、こけむす階に切々と鳴く蟋蟀を見るにつけ

でも悲しい。旅立つ人を送って更に西のかた旅路を行き、水面に問う、「琵琶を弾いているのは誰か」と。はなはだ悲しいのはこの江山の景色を全て鳴くもずに与えてしまうことである。( )

陳允平「小重山」

岸柳黃深綠漸饒。林塘初雨過，漲蒲萄。鞦韆亭榭彩旗交。鶯聲裏，春在杏花梢。慵整翠雲翹。眉尖愁兩點，倩誰描。斜陽芳草暗魂銷。東風遠，猶凭赤闌橋。

(後闕訳：物憂げに漆黒の髪を整えあげる。眉先に点じられた愁いは誰のせいか。沈みゆく陽、芳しい草、鬱々として魂も消えんばかり。東風が遠くに感じられるようになって、なお橋の赤い欄干にもたれかかり佇むのである。)

張炎「祝英台近」(与周草窓話旧)

水痕深，花信足，寂寞漢南樹。轉首青陰，芳事頓如許。不知多少消魂，夜來風雨。猶夢到、斷紅流處。最無拋。長年息影空山，愁入庾郎句。玉老田荒，心事已遲暮。幾回聽得啼鴉，不如歸去。終不似、旧時鸚鵡。

(前闕訳：水かさが増し、花の訪れもとうに過ぎた頃、寂寞として漢南の樹の思い(懐古の念)を催す。頭をめぐらせて青々とした木陰をみれば、春のよい時期もこのように終わってしまったのかと思う。夜通しの風雨にどれほど魂も消えそうになったことか。なお夢は散った花びらの流れる先へといきつくのである。)

陸游の「沁園春」は『中興以来絶妙詞選』卷二(四部叢刊本)に所収のものでは「別恨」という題がついている。「秦楼」とは妓楼のことであり、おそらく妓女と男性との別れを詠んだ詞であろう。閨怨の詞とはいえないが、男女の別れの「消魂」という点で、前代の詞と近いものがある。また、別れによって「消魂」するのは「倦客」

である男性であるので、単に閨怨のみを描いた詞ではなく、さすらう身の憂いをも含んでいよう。宋代の「銷魂（消魂）」の詞には、このように、様々な感情が入り組み合い「銷魂（消魂）」するという例が多いようである。それだけ詞の表現するもの、ひいては「銷魂（消魂）」の表すものの範囲が拡大したと解釈してよいだろう。

姜夔の作も同様である。「八婦」は、添え書きにあるように友人との別離を主題とし、唐詩の「銷魂（消魂）」の典型的であった送別の詞であるが、それだけではない。彼自身も長沙に旅の仮住まいをしている時の作であつてその中の友人との別れであり、「銷魂」は別離に更に旅の愁いが加わつた、深い悲しみを表している。「送客重尋西去路，問水面、琵琶誰撥」は白居易「琵琶引」を典故とし、主人が舟で帰る客を送つていく場面を下敷きにした表現である。

南宋末期の人物である陳允平の詞は、唐五代で定着した閨怨の詞における「銷魂（消魂）」の例であり、「斜陽」、「憑赤闌橋」等、『花間集』中にもよくみられる語彙を用いた典型的な閨怨の詞である。閨怨以外の詞が増加しても、このような『花間集』以来の「銷魂（消魂）」を用いた閨怨詞は、北宋・南宋を通じてなくなることはない。

張炎の「祝英台近」には「周草窓（周密）と旧きを話す」という添え書きがついている。前闋の「漢南樹」、後闋の「庾郎句」は庾信の「枯樹賦」を踏まえ、世の推移を歎じたものである。作者の張炎もまた友人である周密も、南宋滅亡ののち遺民として生涯を送つた者であるので、この「消魂」には、単なる懷古にとどまらず、亡き国を思う情も含まれており、李煜の「子夜歌」に通ずる例であるといえよう。

以上のように、宋詞における「銷魂（消魂）」は、閨怨に限らず、送別・懷古・旅愁といった従来の詩の要素をも含むようになる。また、閨怨の詞にしても、宋代には唐五代のような画一的なものは減少し、様々な感情が入り交じつたものが多くなる。「銷魂（消魂）」も基本となる別離、または失う悲しみ、という方向性からは外れな

いながらも、複雑な感情を表現するようになる。これは、詞自体が閨怨のみにとどまらず詩の領域にまで表現を拡げたことに伴う現象であり、「銷魂（消魂）」の詞も、閨怨のみならず、従来ならば詩で詠まれていた領域にまで表現を拡げた、ということを表している。しかし、「銷魂（消魂）」自体の詞における表現の幅が、詩の領域にまで拡がっても、「銷魂（消魂）」は詩ではかえって用いられなくなる傾向にある。これはどういうことを表しているか。宋代、詞が時代を代表するようなジャンルとして隆盛するに伴い、詞と詩との境界線は唐五代よりも更に明確になる。その中で詞と詩とで語彙の使い分けが生じ、詞の語として定着した「銷魂（消魂）」は詩では意識的に用いられなくなっていくたのではあるまいか。つまり、詞で用いる語はあえて詩では用いない、という意識が一般的に存在していたのではないだろうか。ゆえに、詞の語彙として定着した「銷魂（消魂）」は、詩中には見られなくなっていくのである。

では、宋代の詩における「銷魂（消魂）」にはどのようなものがあるか。まず「銷魂（消魂）」という表現を詩に用いている主要詩人には、北宋期には王禹偁・晏殊・梅堯臣・蘇軾・秦觀・賀鑄・晁補之・張耒、南宋期には楊万里・陸游・范成大らが挙げられる。それぞれの作品数を挙げると、陸游は十五首、張耒八首、楊万里と范成大が三首ずつ、他の詩人は一、二首である。詩の内容を見るに、前代の「銷魂（消魂）」の詩を踏襲した、送別や旅愁における作がほとんどである。

楊万里「衝雪送陸子静」

猛落還中歇、疏飛忽驟繁。平欺芦屋脊、偏護竹篙根。

対面看童子、低頭印手痕。銷魂送行客、行客更銷魂。

（銷魂して旅立つ人を送り、旅立つ人も更に銷魂する。）

陸游「劍門道中遇微雨」

衣上征塵雜酒痕、遠遊無處不消魂。此身合是詩人未、細雨騎驢入劍門。

（衣についた旅の埃にまじって酒の痕が染みつき、はるか遠くまでさすらってどこへ行っても魂も消えんばかり。）

楊万里の作は典型的な送別詩の「銷魂」である。見送る側も送られる側も共に別離の悲しみにより「銷魂」という言い回しは一種の定型表現であり、例えば范成大の「君帰り我去り両つながら銷魂、愁ひは千山に満ちて瘴雲を鎖さず（「題楊商卿扇」）」などもその例である。

「劍門道中遇微雨」は、陸游が、当時金との対立の最前線であった南鄭より成都へと退く時の作であり、自分をはたしてこのまま詩人として一生を終えてしまうのか、という煩悶を含む詩である。定まらぬ我が身を歎く「消魂」であり、旅人の愁いをもいう。陸游に多いのはこのような懐古、旅愁による「銷魂（消魂）」であり、他にも「如今首を回らせば却って消魂す（「懷旧六首・一」）」や「寺楼倚る処 客魂消ゆ（「旅遊二首・二」）」などがあ  
る。みる限りでは、宋詩における「銷魂（消魂）」の詩は、初唐・盛唐の頃にみられた送別・懐古・旅愁を主題にしたものがほとんどである。その中で特徴的なのは、張耒「残春三絶・二」のような閨怨詩である。

張耒「残春三絶・二」

闌干倚遍更消魂、春到淮南得幾分。裊裊柳枝煙雨濕、画楼残角送黄昏。

（闌干に寄りかかりきれば、ますます魂も消えたよう、春が淮南に訪れてから、もうどれほどになったろうか。）

「闌干に倚る」、「画楼残角」、「黄昏」など、閨怨の詩詞に多用される語彙を用いた「銷魂（消魂）」である。晩唐・韓偓の流れを汲むと考えるとよいだろう。宋詩における「銷魂（消魂）」の閨怨の用例は、筆者のみたところ

によれば張耒だけである。張耒の詞は数首しか残っていないため、彼の詩と詞とを比較することはできない。わざわざ閨怨の「銷魂（消魂）」を詩に用いたところに何か意義があるのかどうかについてはわからないが、しかしこの閨怨の「銷魂（消魂）」が、張耒特有のものであったという可能性は否定できない。どちらにせよ当時の他の詩人の用例から、閨怨の「銷魂（消魂）」は詩ではなく詞で用いるのが一般的であったことが推察できる。

以上のように、宋詩における「銷魂（消魂）」は、別離であったり懐古、旅愁であったり、いずれもそれぞれ唐詩の「銷魂（消魂）」の流れを受け継ぐものであった。ただ、この時期には詞の語として認識されていたであろう「銷魂（消魂）」を詩に用いたことに何か意味があるのかどうか、という点については、更なる考察が必要である。先に挙げた「銷魂（消魂）」を詩に用いている人々の中に詞人としても名を馳せた人物が多いことから、詞の語彙を詩にも流用したということも考えられるのだが、憶測の域を出ない。

## 五、結び

「銷魂（消魂）」は江淹「別賦」に端を発し、唐代の詩において別れの悲しみを表現する詩語として用いられた。徐々に様々な別れの型を持つようになり、そのうちのひとつ、晩唐期に定着した閨怨詩における用法が、同時期の詞へと移行していく。これは当時の閨怨詩と詞とが内容的に非常に近かったためである。そして唐五代、『花間集』の段階で、詞における「銷魂（消魂）」は閨怨を表現する語として定着する。

宋代にはいると、詞そのものが表現する領域を詩の分野にまで拡大する。それに伴い「銷魂（消魂）」表現を用いる詞にも、閨怨だけでなく送別や懐古など、従来詩で用いられていた用法がみられるようになる。しかし、詞

における「銷魂（消魂）」の表現する領域が拡がり詩の要素をも含むようになって、かえって詩には用いられなくなっていく。これは、宋代、詩詞の分化が明確になるに伴って、詞の語は詩には用いないという意識が働いたものであろう。このように、人々の詩と詞とに対する意識の違いは、ひとつの語彙にも表れているのである。この後元代には、再び詩で「銷魂（消魂）」が多く用いられ、また閨怨の「銷魂（消魂）」の用例は曲へと取り入れられる傾向にあるのだが、それについては、稿を改めて述べようと思う。

注

① 老子化胡経玄歌「太上皇老君哀歌七首・三」は以下の通りである。「吾哀時世人。不信於神明。先人与種福。子孫履上行。衣厚飯得飽。灾考不到門。口氣頭嘘天。自謂常終日。看師真遼然。得病叩頭請。外恭心不敬。神明以知人。三魂係地獄。七魄懸著天。三魂消散漸。五神不安寧。伺命來執宰。丞相踏地暝。左神不削死。右神不著生。生神不衛護。煞神來入身。或患腰痛。或患頭目疼。百脈不復流。奮忽入黄泉。天門地戸閉。一去不復還。」

② 『樂府詩集』卷五十八・「琴曲歌辭」に収められる「思婦引」の解題には「一曰「離拘操」。『琴操』曰、「衛有賢女、邵王聞其賢而請聘之、未至而王薨。太子曰、『吾聞齊桓公得衛姬而霸、今衛女賢、欲留之。』大夫曰、『不可。若賢必不我聽、若聽必不賢、不可取也。』太子遂留之、果不聽。拘於深宮、思婦不得、遂援琴而作歌、曲終、縊而死。」晋石崇『思婦引序』曰、「崇少有大志、晚節更樂放逸。因覽樂篇有『思婦引』、古曲有弦無歌、乃作樂辭。」但思婦河陽別業、与琴操異也。『樂府解題』曰、「若梁劉孝威『胡地憑良馬』、備言思婦之状而已。」按謝希逸『琴論』曰、「箕子作『離拘操』。」不言衛女作、未知孰是。」とある。

③ 『梁書』卷四十一・劉潛伝に「及侯景寇乱、孝威於圍城得出、隨司州刺史柳仲礼西上、至安陸、遇疾卒。」とある。

④ 明・莫是竜『筆塵』に、「寒鴉飛數点、流水遶孤村。斜陽欲落処、一望黯消魂。此隋煬帝野望詩也。何異唐人五言絕句体耶。秦少游改作小詞。」とある。

⑤ 秦觀「滿庭芳」は以下の通り。「山抹微雲、天連衰草、画角声断譙門。暫停征棹，聊共引離尊。多少蓬萊旧事，空回首、煙靄紛紛。斜陽外，寒鴉万点，流水繞孤村。銷魂。当此際，香囊黯解，羅帶輕分。謾贏得、青樓薄倖名存。此去何時見也，襟袖上、空惹啼痕。傷情處，高城望断，灯火已黄昏。」また、秦觀がこの詞に煬帝の詩を用いているという指摘は、『茗溪漁隱叢話』後集・卷三十三「秦太虚」にも「芸苑雌黄云、『…中間有「寒鴉万点，流水遶孤村」之句、人皆以為少游自造此語、殊不知亦有本。予在臨安、見平江梅知録云、「隋煬帝詩云、寒鴉千万点、流水遶孤村。少游用此語也。』…』茗溪漁隱曰、「晁無咎云、「少游如寒景詞云、斜陽外，寒鴉万点，流水遶孤村。雖不識字人、亦知是天生好言語。」其褒之如此、蓋不曾見煬帝詩耳。』」とある通りである。

⑥ 蔡琰「胡笳十八拍・十三」（『樂府詩集』卷五十九）全文は「不謂殘生兮卻得旋歸、撫抱胡兒兮泣下露衣。漢使迎我兮四牡駢駢、胡兒号兮誰得知。与我生死兮逢此時、愁為子兮日無光輝。焉得羽翼兮將汝歸、一步一遠兮足難移。魂消影絕兮恩愛遺、十有三拍兮弦急調悲、肝腸攪刺兮人莫我知。」であり、また、「胡笳十八拍」が後人の作であろうという説は明・胡應麟の『詩藪』外編卷一・周漢にも「文姬自有騷体悲憤詩一章、雖詞氣直促、而古樸真至、尚有漢風。胡笳十八拍或是從此演出、後人為作、蓋浅近猥弱、齊梁前無此調。」とある通りである。特に唐人の偽作であるという説は、入矢義高氏の「『胡笳十八拍』論争」（『中国文学報』十三・一九六〇）中に挙げられる諸々の論文を参考にした。

⑦ 暢当「九日陪皇甫使君泛江宴赤岸亭」は以下の通り。「羈旅逢佳節、逍遙忽見招。同傾菊花酒、緩擢木蘭櫓。平楚堪愁思、長江去寂寥。猿啼不離峽、灘沸鎮如潮。举目関山異、傷心郷国遥。徒言飲滿座、誰覺客魂消。」

⑧ 張喬「寄績溪陳明府」は以下の通り。「古邑猿声裏、空城只半存。岸移無旧路、沙漲別成村。鼓角喧京口、江山尽汝濱。六朝興廢地、行子一銷魂。」

- ⑨ 胡曾「望思台」は以下の通り。「太子銜冤去不回、臨舉從築望思台。至今漢武銷魂處、猶有悲風木上来。」
- ⑩ 元稹の悼亡詩については陳寅恪『元白詩箋証稿』（上海古籍出版社・一九七〇）第四章「艷詩及悼亡詩」参照。
- ⑪ 元稹「感夢」は以下の通り。「行吟坐歎知何極、影絕魂銷動隔年。今夜商山館中夢、分明同在後堂前。」
- ⑫ 高蟾「長門怨」は以下の通り。「天上何勞万古春、君前誰是百年人。魂銷尚愧金炉燼、思起猶慚玉輦塵。煙翠薄情攀不得、星茫浮艷採無因。可憐明鏡來相向、何似恩光朝夕新。」
- ⑬ 李中の作風については、辛文房『唐才子伝』卷十に、「李中字有中、九江人也。…（中略）…『西園雨過好花尽、南陌人稀芳草深』等句、驚人泣鬼之語也。…（後略）」とある。
- ⑭ 王士禛『花草蒙拾』・「詩詞曲分界」より。「或問詩詞曲分界、予曰、『無可奈何花落去、似曾相識燕歸來、定非香斂詩。』」
- ⑮ 晏殊「浣溪沙」は以下の通り。「一曲新詞酒一盃。去年天氣旧亭台。夕陽西下幾時迴。無可奈何花落去、似曾相識燕歸來。小園香徑独徘徊。」
- ⑯ 沢崎久和氏「『花間集』における「昏・魂・痕」等について」（『高知大國文』十五・一九八四）
- ⑰ 李煜「子夜歌」は以下の通り。「人生愁恨何能免，銷魂独我情何限。故国夢重帰，覚来双淚垂。高樓誰与上，長記秋晴望。往事已成空，還如一夢中。」
- ⑱ 宇野直人氏「李後主の詞境―宋詞の先駆として―」（『中国古典詩歌の手法と言語』所収・研文出版・一九九一）参照。
- ⑲ 『茗溪漁隱叢話』後集・卷三十九「長短句」に、「芸苑雌黄云、『…世伝永嘗作輪台子蚤行詞、頗自以為得意。其後張子野見之、云、「既言勿勿策馬登途、滿目淡烟衰草、則已弁色矣。而後又言楚天闊、望中未曉、何也。柳何語意顛倒是。』』」とある。
- ⑳ 村上哲見氏「北宋詞論」（『宋詞研究』所収・創文社・一九七六）参照。
- ㉑ 白居易「琵琶引」の該当箇所は以下の通り。「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。主人下馬客在船、举酒欲飲無管弦。醉不成

歎慘將別、別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發。尋聲黯問彈者誰、琵琶聲停欲語遲。移船相近邀相見、添酒迴灯重開宴。(後略)」

⑳ 庾信「枯樹賦」の該当箇所は以下の通り。「桓大司馬聞而歎曰、昔年種柳、依依漢南。今看搖落、悽愴江潭。樹猶如此、人何以堪。……」

㉑ 范成大「題楊商卿扇」は以下の通り。「君婦我去兩銷魂、愁滿千山鎖瘴雲。后夜短檠風雨暗、誰能相伴細論文。」

㉒ 陸游「懷旧六首・一」は「鶴鳴山下竹連雲、鳳集城邊柳映門。當日不知為客樂、如今回首却消魂。」、また「旅遊二首・二」は「本自無心落市朝、不妨隨處狎漁樵。螺青点出暮山色、石緑染成春浦潮。果馭下時人語鬧、寺樓倚處客魂消。流年不貸君知否、素扇团团又可搖。」

※使用したテキスト

『先秦漢魏晉南北朝詩』

(遼欽立輯校・中華書局・一九八三)

『玉台新詠』

(徐陵輯・文学古籍刊行社・一九五五)

『樂府詩集』

(郭茂倩撰・中華書局・一九七九)

『全唐詩』

(彭定求撰・中華書局・一九六〇)

『全宋詩』

(北京大学古文獻研究所編・北京大学出版社・一九九八)

『花間集註』

(華鍾彥撰・中州書画社・一九八三)

『全唐五代詞』

(張璋・黃畬編・上海古籍出版社・一九八六)

『全宋詞』

(唐圭璋編・中華書局・一九六五)